

銅座の変遷と住友家

宮 本 又 次

一、 は し が き

銅座に関しては「長崎市史」（「東洋貿易篇」）が詳しく、住友修史室編「泉屋叢考」各冊も随所にふれているが、いまだ、近世後期にまで及んでいない。

こうした先人の述に導かれながら、私なりに銅座の変遷をあとづけ、整理することにする。

銅座は前後合せて、三回改廃している。

- (1) 元禄の銅座 元禄十四年～正徳二年
- (2) 元文の銅座 元文三年～延享三年
- (3) 明和の銅座 明和三年～明治元年

しかもこの間においても、何等かの統制を加えられている。すなわち元禄と元文の銅座の間には銅吹屋仲間が銅会所を大阪と長崎とに設置している。元文と明和の銅座の間には長崎会所の吟味役、請払役が大阪に出張して、銅会所で業務をとっている。だから銅座という名前の機関がその間は廃止されていたとしても、始終一貫して何等かの銅統制策がとられていたと考えるべきである。

二、 元 禄 の 銅 座

住友理兵衛友以は京都三条大橋上ル孫橋町に住み、銅の採鉱・製練および交易を業としていたが、その後大阪に本拠を移し、淡路町一丁目に本店を構え、

銅座の変遷と住友家

内淡路町に吹所を開き、ついで鰻谷にも吹所と別宅を設け、実父の理右衛門とともに、長崎・平戸・博多と大阪の間を往来し、外商との銅の取引で、一層の発展をなした。

寛永十二年以来、鎖国の形勢は次第に進み、ついに十四年には鑄銭料銅および軍用銅の需要のために銅の輸出は禁止されてしまう。¹⁾ この銅の輸出禁止によって、銅貿易業者はもちろん銅山師以下銅山関係者一同は渡世にも窮することになり、そこで銅貿易業者たちは解禁歎願をなすことになる。このとき江戸に下って奔走したのは泉屋利兵衛と(理)同弟忠兵衛・同八兵衛・伯父金屋長右衛門・伯母聶鋤鉞屋与兵衛など泉屋三兄弟と一族二人、合せて五人、その外の他家は二人で、合計七人であった。この度々の歎願で、正保三年遂に解禁となり、十人あまりが特許権をうる。その中には前記泉屋三兄弟と一族の一人がいた。当時泉屋が如何に有力であったかがわかって。²⁾

オランダへの輸出銅は解禁後もしばらく、そのままであったが、明暦頃から大いに伸びはじめる。寛文期にはさらに増し、中国への輸出を加えると二百八十～九十万斤前後となり、寛文年間には総輸出高は約八万両の中、銅だけが五万五千～六千両にも達するに至る。しかしこのように伸びたのにもかかわらず、寛文八年には再び輸出禁止になってしまう。

そこでまた解禁歎願が展開されるに至る。泉屋吉左衛門・同五郎右衛門・同与九郎の三人と大阪屋仁左衛門の外、堺の銭屋作右衛門・同七右衛門・江戸の銭屋半兵衛の銭屋ら三名も加わる。しかし銭屋の三人は大阪屋と共同経営程度のものであったから、泉屋がその主動的地位をもったと思わねばなるまい。そしてのち別に二名が免許される。

寛文八年貿易が広範囲になり、それらをとりあつかったものは他の物品を取扱わざるを得ることになり、丁度国内の産銅額もましてきたときなので、にわかには新銅貿易業者が続出し、結局総数十六人になる。³⁾

延宝元年に阿形宗智の新規銅貿易の出願問題がおこる。これは幕府直轄の足尾銅山が栄え、多量の銅を産出、幕府の手持銅もふえたのに目をつけて、阿形

銅座の変遷と住友家

宗智が名義人になった。河村瑞賢を金主とし、古くからの銅屋である銭屋と大阪屋とが話し合っ、この幕府の手持銅を毎年十万貫ずつ一万両で払下げをうけ、これを異国向に吹いて、長崎で外人に売渡し、その損銀（当時の相場で計算し三千両の損金となる）の代りに、長崎での銅売捌の肝煎役を命ぜられ、惣銅売高のうち一割の口銭をもらいうけたいというのであった。つまり銅屋仲間住友吉左衛門ら計七名が少数で利益をとっているのを分割してほしいというのである。⁴⁾

そこで銅屋たちは反対するに至る。かれらが計画しているだけの足尾銅を銅座一同が引き受けましょう。これによって生ずる損失は銅座銘々の売渡高に応じて、負担しましょうと申し出た。

この案に対し不服の銅屋は脱退廃業したりしたが、結局幕府は宗智に与えた内許をとりけす。銅屋たちは改めて五万貫の払下げを願いいで、延宝三年に許可される。⁵⁾ 泉屋・大阪屋・平野屋・銅屋・大塚屋・銭屋の六軒が請人になって、五千両の家賃を差出すことになる。⁶⁾ しかもその半分ちかくが、泉屋吉左衛門に割当てられる。（二千二百七十両）

また買請銅は仲間の申合わせによって、寛文十二年と延宝元年の銅売渡高に応じて割当てられる。そのうち泉屋平八・与九郎の割当が三分の一以上にたっている。⁷⁾

この訴願運動ではしばしば泉屋吉左衛門・同五郎右衛門・同三右衛門が代表者となり、買請銅の割当にも重要な地位に上る。だがこの買請銅はその後一回だけ行われただけで、停止になってしまう。

しかしこの頃足尾山師の方から異国向に吹いて、長崎におくり、清・蘭両国人の総売上高の五分の一だけを直売りしたいと願い出る。これは延宝四年から実施される。⁸⁾ また泉屋と大阪屋が江戸に出店をもち、長崎に名代を詰めさせていたところから、両家はその代金の為替方を命ぜられることになる。そこで年々一万両分の家賃として、泉屋から八千八百両、大阪屋から二千二百両分を出し、代金の半分は翌年三月中、残り半分は九月十五日迄に、また一万両以上の分は十二月二十五日迄に上納することに取りきめ、翌五年より実施した。⁹⁾

銅座の変遷と住友家

これを五カ一為替方といった。

この五カ一銅もさっそく古来からの銅屋と関係をもつこととなったが、ついで延享五年からは銅の江戸より長崎への輸送も泉屋・大阪屋にまかされた。足尾銅の産出減退にともない、元禄四年からは下野国栗山銅も一緒に両家の支配に委ねられることになって、一層その関係が密接となる。¹⁰⁾

この間にも銅の産額は次第にまし、銅貿易も有利になって来たので、新たな志望者もあらわれ、特許されたものを妨げられたので、幕府の方で古来からの経緯をよく調査して、延宝六年四月には改めて十六人の銅名代を確認した。銅貿易株である。¹¹⁾ そこでこの十六人の独占になったわけであるが、その内には大阪の泉屋吉左衛門（淡路町一丁目）同与九郎（同上）同平八（柳町）同平兵衛（南問屋町）があり、泉屋平兵衛は中絶名代の復活を認められたもので、結局泉屋は四名代を保有することとなる。全国で十六名の名代中の四分の一、大阪の名代十に対し、五分の二を占めるに至る。¹²⁾

これからは銅貿易株がきまる。名代数が限定されて、これ以後はこれが基準となって、みだりに変更ができなくなる。新たに開業するものは旧業者の名代を譲りうけ、しかも当局の認可を受けねばならぬことになる。

その頃の日本の年間輸出銅は三百万斤余であったが、その中住友は全体の三分の一以上も引きうけている。その後貿易は大いに盛んになり、貞享頃には年間輸出額は五百万斤となり、さらに元禄九年には八百八十万斤、同十年には八百五十万斤に達した。しかし一方では貞享二年に長崎の貿易額を制限し、唐船は銀六千貫、オランダ船は三千貫までとする。それ以来唐・蘭船の積戻船が多くなると抜荷もおこなわれるに至る。これは銅貿易の場合でも同じで、毎年棹銅以外の鋳型のちがう銅を長崎におくって、密輸出をするものがあとをたたない。

そこで決められた貿易額の枠以外に、輸入品を銅との物々交換で買うと、余分の金銀を流出せずに済み、しかも輸入品は市場に豊富に出廻るから値段も下り、合せて密貿易を防ぐことになるだろうという考えがおこってくる。

そこで一定の運上金を幕府におさめて、代物替（しろものがえ）をしたいと

銅座の変遷と住友家

願い出るものが表われる。

これは貨幣によらず、物々交換で取引する貿易で、銅の外、倭物（煎海鼠・干鮑・鑢鱗と諸色）をあてる。丁度元禄の貨幣改鑄があって、貨幣価値が下っていたから、むしろ代物替を希望するようになる。そこで幕府の方も元禄十年には中国船には六百四十万二千斤、オランダ船には二百五十万斤の銅を毎年売渡すことに決定する。これらの輸出銅はこれ以後は「御用銅」といわれる。貨幣に代る貿易の決済品という意味であろう。¹³⁾

要するに元禄十四年大阪に銀座加役として、銅座を設置し、銅商売人を統制して、大阪への銅集荷体制を強化すると共に、長崎会所と密接な関連をもたせて長崎輸出銅（御用銅）の優先的調達及び輸出に関する一切の業務を管理させたのであった。ここに銅座と提携した長崎会所が銅貿易を総括し、貿易官営化を推進するという方向がはじめて打ち出されたのであった。

しかし元禄十年に、この御用銅は年に一万六千両の運上金を納めるという条件で、江戸の桔梗屋又八、岡久左衛門・納屋長左衛門に請負わすことになる。しかしこれまで上方の貿易商はその商売の必要から、長崎に送る資金を銅屋仲間に依頼して為替として送っていた。これが銅屋の「銅買入資金」にもなっていた。ところが元禄十年に新しい商人の銅貿易一手請負になっていたのも、危んで貿易商は為替取組をしなくなる。そこでこの三人は資金が不足して、銅の調達が思うようにいかぬ。そのため従来の銅屋仲間に泣きついてくる。大阪町奉行が調停にたって、ともかくこの三商人による銅の一手請負はわずか一年で、中止になってしまう。

元禄十年は長崎貿易における銅輸出の記録的な年で、唐蘭船で合計八百九十万六千二十三斤を輸出したのであった。しかし元禄十一年の正月には上方で銅が払底していることが、長崎に知らせられる。やがて幕府は輸出銅の額を元禄十年の輸出実績、唐船六百四十万二千斤、蘭船二百五十万斤に限らねばならなかった。¹⁴⁾

元締役高木彦右衛門は長崎奉行へ口上書を提出し、銅貿易をこれまでのよう

銅座の変遷と住友家

に十六人の銅屋独占にまかせていては心配であったので、今後はいずれの独占をやめて銅貿易は解放することにした。長崎会所の貿易利益から六万両を控除して長崎へ回送する銅の“取替銀”（前渡銀）として同意したいという高木の上申は聞きとどけられた。

元禄十二・三年は延宝六年以降、銅貿易を独占していた銅屋以外のものも銅貿易へ割込んでくる。それぞれ廻銅一万斤につき銀十貫目の取替銀を渡されて取引する。しかしながらその不足は緩和されず、元禄十四年には九百九十貫の銀輸出特例（丁銀八百貫、銀道具百九十貫）を認めざるを得ず、宝永通宝銭の輸出をもゆるすに至る。こうした背景において、銅座が設立される。¹⁵⁾

元禄十一年からはまたもとの銅屋仲間が命ぜられることになる。それにしても元禄十年にきめた目標額の歳額八百九十万二千斤というのはあまりにも多すぎた。予想に反して銅の集荷はうまくいかず、元禄十三年にはようやく五百十二万斤余を輸出し得たにすぎなかった。¹⁶⁾ そこで幕府は新たに元禄十四年正月に大阪の銀座をして銅座を兼ねさせ、銀座加役として銅の集荷・鑄造輸出に関する一切の業務を管理させることにする。銅座をして諸国産出の銅を購入して長崎に運送させることにした。

元禄十四年二月二日江戸詰めの長崎奉行大島雲八と丹羽長守とから長崎詰の同役近藤用章外一人にあてた書翰によるとこの設立事情がよくわかる。大島と丹羽とが、老中阿部豊後守によれば、勘定役萩原重秀から直接伝えられた事項は次の如くであった。

(一) 銅座へ公儀の御金をかす。この金で棹銅を調製させ、元値段で長崎へ送らせる。銅座は長崎からその代銀をうけとり、なしくずしにして返納する。代銀が滞っては手支えになるから、滞納のないようにしなければならない。長崎で銀繰りの具合が悪るければ、かねて用意のしてある銅買銀をこれにあてる。

(二) 棹銅は銅座から送状をおくる。そちらで受取った銅高に引合わせ、代銀は長崎町年寄から送らせる。これまでのように為替送りでもよく、送状持参のものへ即金で手渡してもよい。

銅座の変遷と住友家

要するに代銀が滞らぬようにせよ。送状は長崎町年寄宛てとし、銅座責任者の印をおすことになっていたが、長崎の町年寄は請取手形を発行せねばならない。

三 銅座は諸山から出る荒銅・製練銅の商売はもちろんその他におよそ銅に関するすべてを引きうける。銅問屋・大吹屋・小吹屋（銅の製練業者を吹屋といい、大吹屋の下請業者を小吹屋という）は銅座の支配をうけて、商売せねばならない。

四 銅座は銀座から願い出て、仰せつけられたものではなく、だからこの者どもに利分などある仕儀ではない。とにかく銅は取りしまらないのであるからきつと支配して商売をさせる。また山々出高なども考えて、手支えのないようにつとめるために、此度銅座を定められたのである。それについて吟味の上外に仰せつけられては、訳立ちがたいので、銀座のものへ仰せつけられたのである。

要するに銅座の設立は銀座の出願によるものではなく、銅貿易の円滑のためであったこと、始業にあたって幕府は銅座へ運転資金を貸しつけ、この資金で棹銅を調製して、元値段で長崎へ廻させ、長崎会所は貿易利益のうちから、棹銅代を銅座に納める仕組であった。¹⁷⁾

輸出棹銅の生産は銅座が一手に握り、銅座とタイアップした長崎会所が銅貿易を一手に引きうけて、貿易官営化が樹立されたのであった。自由輸出が差止められたので、これまでの銅屋仲間、名代は銅貿易独占の権利を失って、その下に従属することとなる。これが大阪銅座の始まりである。¹⁸⁾

元禄の銅座は銀座の一部局として設けられ、大阪の石町にあった。銅座の役人も銀座の年寄がかね、大阪町奉行の管轄下にあった。銅座は勘定所の支配下におかれ、当初は京都銀座年寄の小南理兵衛・岸部次郎右衛門・中村九郎右衛門・日比五郎左衛門の四名を、大阪銅座掛りに任命した。中村は大阪銀座（京都銀座の支所）に詰めていたもので、これに日比を加えて、二人詰めとし、二人ずつ交替で勤めることにした。¹⁹⁾

銅座の変遷と住友家

銀座年寄の下に手代・下人がいた。その人々の給料は大阪町奉行所からでた。

銅吹も兼ねない、単なる銅の輸出業者は廃業のやむなきに至り、銅吹業者も直売権を停止されることになった。はじめ銅輸出業者は銅吹をかねたものが多かったが、しだいにへって銅座設置の頃には泉屋二軒、大阪屋・大塚屋・熊野屋の五軒になってしまった。中でも御用銅山、別子・立川を経営する泉屋が實際上銅座の業務の上ではもっとも有力で、常に銅の買上げ、吹立ての実務にあたっていた。²⁰⁾

元禄十四年銅座掛りの銀座年寄中村九郎右衛門の推薦で、泉屋吉左衛門・大阪屋久左衛門が江戸に下り、勘定奉行萩原近江守に銅の生産をますための銅山の経営方法などについて、数十カ条の意見書を提出している。²¹⁾

一般民間人による自由輸出は出来なくなり、銅貿易の名代は自然消滅となり、ただ従来 of 業者の中、当時銅吹を兼業していたものだけが、小吹屋とともに銅座要用の異国向棹銅を製出することになる。いわば間接の銅貿易にあたるにすぎなくなる。

大阪に廻送された銅を銅問屋から銅座にとどける。また吹屋からも毎月の買高、売渡高を届出で、申告するのである。これによって銅座が買上げた銅は御用銅（輸出向）・地売銅（国内向）となる。御用銅の方の買上値段は百斤につき百五匁と据置かれていたが、銅の生産費は次第に少くなる。また地売銅の方は騰貴する。そこで全国の主な銅山にその産額に応じて、御用銅を割当てたがこの方法も銅の買入資金の繰合せがうまくいかない。御用銅の集荷をよくするため、輸出銅の定高も変更したりした。

銅座の銅買入資金は長崎貿易から生れる利潤でまかなわれたものだが、元禄の銅座では長崎会所の利益金の中、千五百貫目の銅座の廻転資金として貸付け、銅座の銅売上収入の中から次第に返済することになっており、御用銅の代金は長崎へ吹屋が銅を廻送したときに支払われた。²²⁾

銅座を設け、官営にしても、銅の集荷の成績はよくなく、正徳元年まで十一年間は多くは五～六百万斤台で、七百万斤を越えたことは三回きりであった。²³⁾

銅座の変遷と住友家

そこで幕府は方針をかえ、正徳二年に銅座を廃止して、ふたたび民間に銅の輸出をまかすことになる。

そして幕府は大阪の銅吹屋どもに長崎へ銅をまわすように命じたが、銅の相場が高値になっていて、長崎の売値段とは格別に相違していたので、だいの損失になるというので断ってくる。

これより先幕府は銀座に督促を加えたが、銀座は近年諸国銅山の産額が減少したといって、かえって銅価の増額を出願し、なかなか決定せず、正徳元年に銀座銅四百五十万斤の輸送を承諾して、不足額は中川六左衛門という商人が引請けを望み、許可される。しかし銅価の騰貴で、翌二年二月まで、かろうじて三百万斤を積下したのにすぎなかった。ここにおいて大阪銅吹屋をして旧の如く長崎廻銅をとりあつかわしたいと思い、町奉行の北条氏英をして内意を伝えさせた。

これに対し銅吹屋は直ちに辞退に及んだのであった。そして総代四名を派して辞退の理由をのべる。当年の銅座出額を六百十萬斤と予定すると、その内銀座より長崎に輸送すべきもの百五十萬斤、中川六左衛門より輸送すべきもの百万斤があろう。その他四十萬斤は銀座入用、五十萬斤は錢座入用、百二十萬斤は諸国細工人向入用となるだろうから、銅吹屋の長崎御用銅買入額は百五十萬斤となる。これに前記の銀座及び中川六左衛門の廻銅額を合せると総計四百万斤となるけれども、銀座の百五十萬斤中五十萬斤は前年度の分であるから、正味三百五十萬斤となり、しかして仮に大阪表において、棹銅百斤銀百四十目に買取るとすると、長崎表において、売口引合は百五匁であって、差引三十五匁の損耗となる。もし銀座、中川六左衛門及び銅吹屋にて、競って銅買入に着手するならば相場はいよいよ騰貴して、損耗がいよいよ大となるだろう。たとえ百斤につき銀三十五匁を補給せられるにしても、長崎廻銅請負の儀は容赦に与りたいという。

正徳二年三月幕府は銅座の兼帯及び中川六左衛門の銅不足額請負を止める。そして大阪の銅吹屋に五百万斤の廻銅を命じたので、総代四名は予定の三百五

銅座の変遷と住友家

十万斤ですら覚束ないのに五百万斤とあっては、到底その任に堪えないと固辞した。しかし万一廻銅額に不足を生じると、官銀をもって外国へ支払い、また銅代銀の下渡も大阪町奉行に指令して、支障無からしめるであろうとの懇命があったので、銅吹屋も遂にこれを諾し、大小吹屋十七軒をもって銅吹屋仲間を組織し、会所を南組木綿町に設けた。この会所は正徳五年鋳屋町に移り、のちまた吉野屋町に移る。²⁴⁾

かつての銅座の用達で、銅の調製にあたっていた大吹屋・小吹屋十六軒に、新たに大吹屋大阪屋の別家一軒を加えて、十七軒となし、この吹屋に金五百万斤の輸出を請負わせたのであった。今回の銅貿易業者は銅座設置前とは大分に変っていて、貿易専業者や大阪以外の居住者はいなくなり、すべて大阪在住の銅吹兼業者のみになる。そして以前から継続しているものは大吹屋であった泉屋吉左衛門・大阪屋久左衛門・大塚屋甚右衛門・熊野屋彦太郎の四軒だけであった。²⁵⁾

また長崎に会所を設け、千丸割法を立てて、各人の負担率を定めた。

九五丸	長堀茂左衛門町	泉屋吉左衛門
九〇丸	西横堀炭屋町	大阪屋久左衛門
七三丸	瓦町一丁目	大塚屋甚右衛門
七三丸	西横堀炭屋町	丸銅屋治郎兵衛
七三丸	西横堀釜屋町	平野屋忠兵衛
七三丸	道頓堀新難波中ノ町	富屋藤助
七〇丸	道頓堀新難波中ノ町	多田屋市郎兵衛
七〇丸	道頓堀湊町	平野屋三右衛門
七〇丸	道頓堀湊町	平野屋ぎん
五四丸	道頓堀新難波東ノ町	熊野屋彦太夫
四二丸	道頓堀湊町	平野屋市郎兵衛
四〇丸	道頓堀釜屋町	大阪屋又兵衛
三九丸	道頓堀新難波東ノ町	熊野屋徳兵衛

銅座の変遷と住友家

三九丸	道頓堀釜屋町	富屋伊兵衛
三九丸	道頓堀釜屋町	大阪屋三右衛門
三三丸	道頓堀釜屋町	川崎屋平兵衛
三三丸	道頓堀湊町	吹屋次左衛門

千丸割法とは、五百万斤という責任額があったので、仲間をつくって銅の買入れと、吹方について、従来の実績によって、千丸割にしたのであった。泉屋吉左衛門は銅九五丸で、その筆頭になった。²⁶⁾

大吹屋と小吹屋との差額はあまりないが、これは平山銅をのぞいて、一般市場の入札購入銅についてのことであったろう。

棹銅を積込める廻船を「御用」の小旗を用い、銅吹屋仲間が奉行所に出頭しあるいは火事場に出張した際、脇差を帶し「御用」の提灯を携うるに至ったのは、このときにはじまる。これは幕府が彼等に与えた優遇であった。²⁷⁾

以上の如く正徳二年の銅座廃止につれて、大阪南組木綿町に銅吹屋をつくり長崎御用銅五百万斤請負にしたが、その後は寛延三年の銀座加役銅座の長崎御用銅会所への改組、宝暦四年の銅吹屋会所の移転と御用銅吹屋会所への改称などと幾度か制度上の改正がつづいた。これらは元禄期をピークとする産銅額の減少と需要増加の矛盾の表現であったといえるであろう。

幕府は享保元年以来諸国山元より買上げた銅を大阪にて棹銅に吹立て、これを長崎に輸送し、従って前には一切の廻着銅額を銅吹屋仲間に届出でていたが、以来は御用銅に限り、廻着額を届けいで、自分商売の方は届出でに及ばないこととなった。享保六年には諸国銅山御用銅割賦額を定めた。²⁸⁾

一五、〇〇〇斤	榊原式部大輔預所
	播 州 銅 山
八五〇、〇〇〇斤	石原新十郎代官所
	別 子 銅 山
五〇〇、〇〇〇斤	同 上
	立 川 銅 山

銅座の変遷と住友家

二八五、〇〇〇斤	飯塚孫四郎代官所
	明 延 銅 山
六七、六七〇斤	鈴木九太夫代官所
	多 田 銅 山
五、〇〇〇斤	森山又左衛門代官所
	飛 弾 銅 山
三、〇〇〇斤	竹田喜左衛門代官所
	石 州 銅 山
三〇、〇〇〇斤	松平陸奥寺守領分
	熊 沢 銅 山
四五〇、〇〇〇斤	南部大膳亮領分
	尾 去 沢 銅 山
一、四〇〇、〇〇〇斤	佐竹石原太夫領分
	秋 田 銅 山
七〇、〇〇〇斤	牧野幸之助領分
	猿 坂 銅 山
二五〇、〇〇〇斤	出羽
	永 松 銅 山
四〇、〇〇〇斤	土井甲斐守領分
	大 野 銅 山

ところが長崎会所の棹銅代銀支払が次第に延滞に及んだので、享保六年十二月幕府御用銅割賦の制を廃止にした。御料の銅山より出ずる荒銅は直接これを長崎に廻送し、長崎にて代銀を支払い、不足の銅額は長崎奉行が吟味の上買入れることにし、大阪の銅吹屋に命じていた吹銅を廃止した。ここにおいて銅吹屋仲間は細工向の銅吹のみになり、困難となったので、吹屋を増さないように注意することとし、銅山師あるいは、銅問屋方より荒銅売渡しを申し来ると早速仲間に通知し、千丸の割法をもって購入すべしとした。²⁹⁾

銅座の変遷と住友家

大阪銅吹屋は棹銅吹立の業を失い、家業の範囲を狭められ、振わなくなっていたが、享保十七年に再びこれを命ぜられるに至り、また活気を呈した。³⁰⁾

しかし長崎に鑄銅所が出来、これまで大阪銅吹屋が一手にて吹立てていた秋田銅は八・九分まで長崎に廻送される有様となり、銅吹屋は仲間全体の利益を擁護するために規約を定めた。すなわち大阪銅吹屋仲間は大阪廻着の銅があると銅吹屋会所に申しいで、仲間中に通達し、銅問屋と商談をこころみ、吹屋中にて買取った。吹屋仲間中は相談をなして、棹売も地売も掛引をなして売方をなした。賃吹は千丸割の法により、買入分は惣仲間頭割であった。買入銅の割賦をうけたときには、百斤に銀三分を銅吹屋会所に出して会所の入用にてあてた。

ここにいう銅問屋とは山元より荒銅を引請くるものをいい、地売銅の取扱をなすものを銅仲買といった。³¹⁾

次に若干朝鮮貿易についてふれておこう。

慶長十四年（1609年）の巳酉約条により、日鮮修好は回復され、宗氏を通じて行なわれた。貿易には公貿易と私貿易があり、私貿易が重要であった。

公貿易には封進（賜物）と看品（朝鮮政府買上品）があった。封進にはたとえば、胡椒・蘇木・明礬・米があり、看品には銅をはじめ蠟・蘇木・水牛角があった。これに対しての返品としては公木（木棉）があった。

私貿易としては主として銀を輸出していたが、銅をはじめ公貿易品と同様な貨物を積載して、人参・白絲・綿布などと交易し、とくに人参を重要輸入品としていた。

貞享二年長崎貿易に御定高仕法が設定され、貿易額に制限が加えられ、輸入貨物銀の三分の二を銅でまかなうようになる。そのため金銀の流出とくに銀の流出を阻止する上に効果をもつ。翌三年には朝鮮貿易についても、同様の措置がとられ、その結果銅の重要性がます。

銅は元来朝鮮における産出がとぼしく、鑄銭用として、これをわが国にもとめた。泉屋住友からは貞享四年の三万斤、代銀約三十貫について、元禄二年ないし

銅座の変遷と住友家

同十年間に合計十一万斤代銀約百一貫目を大阪の対馬屋敷に売り渡している。泉屋と対馬屋敷との間には三吉屋という対馬問屋があって、口銭をとっていた。³²⁾

元禄十年長崎会所の設置で、貿易官営化がなされたが、元禄十四年に銀座加役としての銅座を大阪に設けたことは前述の通りである。これまで対馬藩の朝鮮輸出銅の調達は大阪の対馬屋敷で行われていて、幕府は関与しなかったが、銅座が出来ると幕府は対馬藩に対し調達した銅高を銅座に申告するよう義務づける。

しかし対馬藩に対しては調達した高の銅座への申告だけで、朝鮮貿易における特殊性をみとめて、従来通りの自由取引を許していた。銅調達額、輸出銅額の決定権は対馬藩にあったわけである。

ところが正徳二年に銅座が廃止されたが、これまで自由的に申告していた対馬藩に対し、届出でなくしては銅の調達をみとめない方法をとるに至った。そして輸出銅高の決定権をかえて幕府の手におさめ、調達高を抑制するに至ったのであった。

銅座の廃止後は、代って銅会所が銅の一切の銅の集荷・製練・売買の統制を行うことになるが、その実務は銅吹屋がすべて担当していた。正徳三年の対馬売り十二万五千斤は泉屋から対馬問屋へ売渡しているし、享保元年と翌二年の対馬売り各十万斤もやはり泉屋からなされていた。

対馬藩の輸出定額は享保ごろすでに十万斤に限定されていたと思われる。すなわち調達高を十万斤とし、これがそのまま輸出定額に固定したものであろう。そして明和三年に至り、対馬藩はこれを十三万斤に引き上げようとするが、失敗して、十万斤の定量貿易になってしまう。³³⁾

(1) 住友修史室生編「泉屋叢考」第九輯 七頁、第八輯「近世前期の銅貿易株と住友」十二頁。

(2) 同上 第九輯 七頁。

(3) 第八輯 四九頁。「大阪市史」第一 四一三頁。

(4) 第九輯 四九頁。「大阪市史」第一 四一四頁。

銅座の変遷と住友家

- (5)(6) 第九輯 五八頁。五九頁。
- (7) 「大阪市史」第一 四一五頁。 第九輯 六〇頁。
- (8) 「泉屋叢考」 第九輯 六七頁。
- (9) 同上 第九輯 六七頁。
- (10) 同上 第九輯 六七頁。
- (11) 同上 第九輯 四一頁。
- (12) 同上 第九輯 二八頁。
- (13) 永積 洋子「大坂銅座」(「日本産業史大系, 近畿地方篇」四〇九頁。)
- (14) 山脇悌二郎「長崎の唐人貿易」九七頁。
「唐通事会所日記」刊本第二, 二五六, 二八九頁。
- (15) 「唐通事会所目録」刊本 第三, 一七四, 三六四頁。前掲山脇氏論文
- (16) 永積洋子「大坂銅座」(「日本産業史大系 近畿地方篇」四〇九頁)
- (17) 「長崎御役所留」下 山脇前掲書 九七頁。
- (18) 「泉屋叢考」第八輯 一三頁。「銅吹屋中より銅座へ差出したる誓詞」
- (19) 「京鑑」四十一番。山脇氏前掲書 九七頁。
- (20) 「泉屋叢考」第八輯 五四頁。永積論文 四一四頁。
- (21) 前掲永積論文 四一四頁。
- (22) 前掲永積論文 四一〇頁。四一六頁。
- (23) 「泉屋叢考」第九輯 一二五頁。
- (24) 「大阪市史」第一 七八一~七八二頁。
- (25) 「大阪市史」第一 七八二頁。「泉屋叢考」第九輯 一三四~六頁。
- (26) 「泉屋叢考」第九輯 一三四頁~五頁。「大阪市史」第一 七八二頁。
- (27) 「住友家史垂裕明鑑抄」「大坂銅座方覚書」「大阪市史」第一 七八二頁。
- (28) 「大阪市史」第一 七八七頁。
- (29) 「大阪市史」第一 七八七~八頁。「住友家史垂裕明鑑抄」
- (30) 「大阪市史」第一 七九〇頁。「垂裕明鑑抄」
- (31) 「大阪市史」第一 七九〇~九一頁「垂裕明鑑抄」
- (32) 「住友商事株式会社社史」一四頁。
- (33) 田代和生「対馬藩の朝鮮輸出銅調達について - (幕府の銅統制と日鮮銅貿易の衰退) - 」(「朝鮮学報」第六六輯)

銅座の変遷と住友家

三、元文の銅座

元文三年四月に幕府は銀座加役として、大阪表銅座を高麗橋内両替町におくこととなる。銅吹屋・銅問屋ら、銅方一切の商売人を支配せしめ、また荒銅・絞銅・間吹銅・合銅・細工向吹銅・同延板など銅一切の売買を掌どらしめた。これは銅採掘の不取締を改正し、長崎廻銅の増加をはかったものである。¹⁾

この年四月に出された触書を見ると銅座をおいた目的は諸国銅山の囲置及び他売を禁じてことごとく銅座に売渡させ、大阪銅吹屋ならびに銅問屋銅商売人をその管理下において、銅及び絞り銀の横流れを阻止し、御用棹銅を大阪で賃吹させて、銅座より長崎会所に廻送させるにあった。長崎廻銅ならびに地売銅は出銅高に応じて割合を定め、長崎に送るのは、山元より値段を定め、地売銅は時の相場をもって銅座に売上げ、銅代は銅座より直ちに請取るべしとしている。²⁾

これによってまず大阪における有銅の処分が必要となり、町奉行所は銅座役所が出来までの同月十二日より十六日までに有銅高を大阪銀座役所に届出させ、売買についても銀座支配をうけさせた。³⁾

廻着銅の届出については山元より提出した員数書のみをもって足れりとせず別に船宿問屋をして廻着毎に銅座に、また町年寄をして毎月六回町奉行所（のちに惣会所とする）に銅員数を届出でさせている。⁴⁾

元文の銅座は銀座役所の隣家を買いたして建てられ、京都から年寄役・勘定役・戸棚役・平役に至るまで、交代勤番した。大阪高麗橋内一丁目に屋敷二カ所を調べるとある。

これより先、元文二年十月に銀座年寄五人が連書して大阪町奉行所に書面を提出しているが、それによると近年銅より絞り出した灰吹銀の売買がみだりになり、銀座ならびに鋳替の外でも売買せられている様子だから、今後は銅吹屋の荒銅買請高等に絞り銀高は、委細銀座へ報告するよう仰付けられたいと訴えている。そこで同年十二月大阪町奉行所より絞り銀については銅吹屋は向後銀座の差図を請けるべき旨を令した。

すなわち当時の銀座は絞り銀の横流れを防止して、すべて銀座に差出させる

銅座の変遷と住友家

ために、つとに銅吹屋の統制を願っていた。ところが銅座が設立されると諸国山元における銀銅絞吹等に銅吹立も停止せられて、山灰吹銀取締りという点では銀座の期待がかなえられたわけである。

銅座を設置して荒銅買上法を定めても、山元を奨励し、彼等をしてつとめて採鉱に従事させ得たかどうかはわからない。むしろ銅座の設立と共に、諸国山元における銀銅絞吹ならびに銅吹立も停止されてしまうことになり、灰吹銀の取締りという点では可なり期待がかなえられた程度であったろう。銅座設立の功は嚴重な法規の力によって、銅買占、罫置の弊をたち得たにとどまるだろう。⁵⁾

この代りに意外にも銅の吹分けに必要な鉛の買占罫置をなすものがあらわれて来た。そこで寛保元年には鉛細工人以外に鉛を買取ってはならぬと令した。翌二年五月には、銅吹屋の鉛一手買入を命じている。また銅吹屋から売払う鉛は吉野町銅吹屋会所にあるから、希望者はこの会所について、吹屋と対談の上買とるべしとしている。⁶⁾

そして元文三年以降、銅山ごとに御用銅と地売銅の割合をきめて、割当てる方法がとられた。そして買上値段は御用銅の場合は山元の卸売値段を基にして銅座が定め、地売銅の場合にはその時々々の相場によることにした。⁷⁾

元文の銅座の再興、御用銅の銅山割当復活を機会に先の大坂御蔵からの立替の方法も復活したが、この場合も先と比べて収支は少しも改善されなかった。⁸⁾

住友では元文五年には百年以上もつづけて来た輸入貿易から手を引くに至り長崎店への「掟」（元文五年七月）にもこのことをきめている。⁹⁾

日鮮貿易においても銅の輸出が早くより行われていたが、約定で定められた公貿易では荒銅があてられ（別に錫などの代納あり）これを朝鮮側は生銅といっていた。また朝鮮側商人との間に一カ月六日間の割で市を開いて取引する私貿易でも銅の輸出が行われていた。これには荒銅も吹銅もとりまじえていた。かねてよりわが国は世界第一位の産銅国であり、ことに元禄の初年別子銅山が開発されてから、産銅額は急激に上昇したことにより、対鮮貿易は大いにのび、その上朝鮮側は銅銭の鑄造によって大いにこれを需要した。しかし元禄十一年

銅座の変遷と住友家

頃から銅貿易は停滞した。元禄の貨幣改鑄による交易銀の品位低下もあったろう。日本国内の銅山も産銅を減退させることになり、享保年間ついに幕府は朝鮮への銅輸出額を十万斤に限定したが、更に元文三年設置の銅座によって対馬藩の銅調達業務を支配させ、これによって朝鮮への銅輸出を抑制し、輸出定額を厳守させようとはかっている。元禄—宝永期には銅座の設置はありながらその支配をうけなかったのに対し、この時点からは対馬藩の朝鮮輸出銅調達も銅座の支配下におかれ、銅買付業務の一切が銅座の差図に従って行われることになる。¹⁰⁾ 元文の銅座設立は、しかし産銅の増加とはならなかった。当時はまだ正徳五年の廻銅定例が基準となって、長崎廻銅額があったが、次第に減少してきたし、銅座設立と共に銅山の経営難も加わって来た。諸国銅山は山元における銅囲置や他売を禁止され、さらに銀銅絞り吹き銅吹立を停止されて、経営難を補う資本の捻出場所をも失うことになった。¹¹⁾

従って産銅額の減少から銅の価格も、当時は享保の中頃に比して、凡そ一倍余に昂騰した。

そこで寛保二年十一月に幕閣は勘定奉行・長崎奉行に申し渡して、唐阿蘭陀の商売物は日本の産物の余分をもって交易すべきものなのに、当時不足の銅を安価にて買取って、その余分を長崎出銀の内にて償うというのは不相当のことなりとしている。そして唐蘭船銅渡し高四百万斤の半減を命じている。¹²⁾

すなわち唐蘭方商売半減、唐船の入港隻数を十艘、銅百五十万斤、蘭船の定額も銀五百五十貫目、協荷五十貫目、銅六十万斤としている。

この定額減少にともない、銅座の銅一手買上及び銅吹屋の鉛一手買入も無用となり、延享元年七月、自今銅座は入用の荒銅額を買取るにより、残余の荒銅は「銅座に無溝、銅問屋より町売致筈」と命じた。¹³⁾

銅座が山元に支払う荒銅代は大阪の御金蔵がまず立替えて、長崎会所で輸入品の入札払いを終えてから、逐次これを引おとしていく方法がとられた。しかし延享三年にこの長崎会所より廻される資金が多量にこげついでいることが長崎会所の発覚するところとなる。このような資金面でのトラブルがあり、その上

銅座の変遷と住友家

に御用銅の集荷不振もあったのである。¹⁴⁾

そのため幕府は大阪御金蔵の銅代立替えを止め、輸入品を落札した上方商品は長崎会所へその代銀を支払わずに、荒銅代引当てとして、直接、それを銅座に払込むことに改めた。¹⁵⁾

すなわち延享三年唐船の定額一五〇万斤の外に五〇万斤を許し、蘭船は銅一一〇万斤に金千両を添えることになり、計三一〇万斤に増加した。だが寛保二年以来の定額減少で、当初銅座の設立の趣旨はすべて失われており、かつまた銅座より御料銅山らに前貸し、あるいは前渡した仕入銀等の未回収高は相当額に達していた。¹⁶⁾ 延享三年にはこの年までの借入金とこの銅買入資金を合せて、銅座は二十万両の負債となっていた。この結果地売銅の統制は撤廃され、御用銅の値段が引下げられる。¹⁷⁾

かくて寛延三年七月銅座の廃止となる。

「大阪銅座発旦御用留」には「先年銀座引請ニ而銅座有之候処、多分之引請銀有之 銅座相止右引負銀ハ長崎会所へ引請、年賦上納相済」と見えている。

(1) 「大阪市史」第一 七九一頁。「御触及口達」

(2) 「大阪市史」第一 七九二頁。田谷博吉「銀座の研究」二九四頁。

(3) 「大阪市史」第三 四〇二～三頁。

四月十二日「廻銅無滞銅座江可相渡儀八ヶ条之事」

(4) 「大阪市史」第一 七九二頁～元文三年御触及口達。「大阪市史」第三 四〇四～五頁。

(5) 「大阪市史」第一 七九三頁。同上書 第三 三九五頁。内久宝寺町二丁目に銅座幼稚園あり、この敷地は銅座敷地の跡と称せられているが、これはこの頃のものであろう。

(6) 「大阪市史」第一 七九四頁。

(7) 永積前掲論文 大阪銅座 四一〇頁。

(8) 永積前掲論文 四一六頁。

(9) 「泉屋叢考」第十輯 四〇頁。

銅座の変遷と住友家

「此度相改当春割符年寄中迄代物商売相止候趣断差出し候而向後落札名前等本商名目相除申候此度も未々之者迄も急度相心得候様に可申渡候」

- (10) 田代和生「対馬藩の朝鮮輸出銅調達について」(「朝鮮学報」第六六輯)
- (11) 三枝博音「日本鋳業技術発達史」二二〇頁。
- (12) 「通航一覽」第四 三〇七頁。
- (13) 「大阪鑄錢座覚書」(大阪府立図書館蔵)
- (14) 山脇悌二郎「長崎の唐人貿易」一七四頁。
- (15) 「会所御用留」五番(「大意書」四、二二二頁)
- (16) 小葉田淳「鋳山の歴史」一九六頁。
- (17) 前掲永積論文 四一六頁。
- (18) 田谷博吉「近世銀座の研究」二九五頁。

四、明和の銅座

寛延三年七月幕府は銀座加役の銅座を廃し、長崎直買入とするに及んで、長崎会所は過書町に長崎御用銅会所を建て、輸出銅は長崎会所が直接に買入れることになる。¹⁾

長崎より会所吟味役、同請払役が出張し、専ら輸出銅の集荷にあたる。御用銅を再び主要銅山に割当てて方法が復活したのである。御定高三百十万斤(延享三年の制定にかかる)を秋田・盛岡・別子・立川・柏木・吉岡・生野・多田銅山にて買調えたが、宝暦四年以来秋田銅百六十五万斤、盛岡銅七十三万斤、別子立川銅七十二万斤を買入れることにした。値段は秋田棹銅百斤につき、百五十六匁五分二厘、盛岡棹銅百三十九匁四分八厘、別子棹銅は百三十九匁四分八厘であった。この三山の中、秋田銅山は寛文十一年の開発、盛岡銅山は明和二年より南部家手山となり、別子銅山は元禄四年泉屋吉左衛門友芳の開発、立川銅山は同五年より開坑し、京都糸割符人大阪屋久左衛門・泉屋理兵衛が順次これを請負い、宝暦十二年より同吉左衛門友紀の請負となったものである。²⁾

銅座の変遷と住友家

銅吹屋仲間は御用銅および地売銅の吹立てに従事していたが、御用銅吹賃は直増を出願するわけにもいかず。また地売銅吹賃は銘々の勝手であったから、中には算用に足らざる程度に引き下げをなし、自他共倒れの風があった。

そこで宝暦十一年正月銅吹屋仲間は申合せをなし、これに背くものはその年一年分の御用銅吹方も半減せしむべしと定めた。³⁾

銅産出額は減少し、これに伴って値段は騰貴したのであった。宝暦十年より明和二年に至る十年間の地売銅平均相場は百斤につき百九十五匁七分余となっていたのに、宝暦十一年より明和二年に至る五年間の平均相場は二百二十九匁七分余に及んだ。⁴⁾

ここにおいて長崎奉行石谷清昌、同新見正栄、勘定奉行小野一吉、同伊奈忠宥の四名から明和二年七月をもって銅座設立の建議が出された。これは長崎銅会所を改組して銅座とし、「一体銅山取締」の任にあたらせる案であった。諸山出銅はもちろん古地銅に至るまで、ことごとく、これを銅座に買上げさせることは元文三年設立の銀座加役の銅座の如くするといっている。⁵⁾

加うるに銅の質入れを禁じ、これによって諸国山元の稼方を奨励しようといひ、銅座の支配する役人・資本・銅買入方及び売出方・吹方などについて一々意見を具し、最後に収支予算書を示し、地売銅百斤につき代銀二百四十目とし荒銅値段百斤を平均銀百五十目とし、これに吹減吹賃五十目を加えて、二百目とすると、差引四十目の利得がある。一年の地売銅高を百万斤と見積り、その収益銀四百貫目、この金六千四百五十両余の内より問屋・仲買らの口銭百斤につき三十目、此金五千両を減じ、更に銅座の諸入用金千両を減じ、残額四百五十両を銅座の純益とするといっている。

しかしながら銅座設立の件は大阪表における問屋・吹方、その外、職方の内情を糺し、かつ現在の有銅高質入銅高をも調査する要があり、よって勘定所は大阪城代松平乗佑に通知し、西組与力二人の出京をもとめ、諸事を商議いたした。

翌年あらためて、勘定方田口八郎右衛門・益田新助の両人を大阪に派遣して、

銅座の変遷と住友家

四月に兩名は調査を終えて復命した。書中現在吹屋・問屋・仲買の所有する荒銅・吹銅・古銅合計七十八万六千四百二十斤，外に二万四千八百五十九斤の質入銅があった。これに銅座設立後の買入銅高を合わせると、頗る巨額に上るであろう。また当時の地売値段は百斤につき二百二匁七分余にして、先の勘定書に示した二百四十目は高きにすぎるから、まず二百十匁の相場にすべしとしている。⁶⁾

調査の結果、大阪問屋の実態は荒銅を仕入れて、吹屋・仲買に売渡すことを業務とし、地売銅販売に無関係であることがわかった。

地売銅の販売益金によって、荒銅買上価格の引上げと銅山への資金融通をもくろんだ当初の計画から一步後退して、問屋前貸の継続をみとめるに至った。それは販売益金が予想以下にとどまる見込が強くなったのと、銅山経営の実態がよくわからぬながら、減産傾向にあるのは出銅原価と仕入原価との間の値幅の狭さに原因していることに気がついたからである。出銅額を維持していくためには矢張問屋資本の利用が必要であると認めたからであろう。⁷⁾

これまで問屋が仕切値段から引落して来た口銭・蔵数・水揚賃を銅座で引落すことになったわけだが、吟味の上は減方もあるべく、減じた分だけ山元のためにもなろうといっている所から銅山業への配慮も窺えるのである。⁸⁾

この八郎右衛門新助の復命書によって石谷清昌らは銅座設置に関し諸国ならびに大阪三郷に達すべき触書案、問屋・吹屋・仲買および銀座年寄ならびに銅座役員に申渡すべき書付案を幕府に呈し、裁可を得た。そして触書案の方は六月三日江戸において、六月十日大阪において発表され、書付案の方は大阪町奉行大阪在勤勘定方より申渡された。⁹⁾

明和新設の銅座は過書町長崎銅会所をもってあてられ、長崎奉行・勘定奉行の両支配に属した。長崎より出張する在来の会所吟味役・同請払役・大阪表在勤の銅会所地役人を主役とし、別に勘定方二名、普請役二名を江戸より出張させた。また大阪町奉行の与力二名、同心二名を付属させた。一カ月交代で銅座事務をなし、与力には五人扶持、同心には一人半扶持を与えた。銅座方与力同

銅座の変遷と住友家

心という銅座役人は半日は朝五時に出勤し、暮七時に退勤した。大阪城代の支配外だが、大阪町奉行の管轄下にもあったのである。¹⁰⁾

明和の銅座設置にあたり、泉屋は糺吹師に任せられ、年三百貫目の給銀をうけて、全国から集まった銅の品質を調べている。

これまでも泉屋は「宝の山」（宝永年間－元文五年）「諸国銅山見方控」（元文四－文政十二年）などの記録をのこしている。これらは家業の必要もあったが、銅座の命令によつての調査聞込みであつた。¹¹⁾

銅座は諸国の出銅を一手に取捌き、長崎御用銅の廻送はいうに及ばず、地売銅の売下げを行い、問屋・仲買・吹屋ら銅方に関係するもの一切を支配した。銅座は廻銅の検査と買上げにあたり、入目をも定めた。問屋口銭は二分と定めた。荒銅代銀は百目につき二匁であつた。

吹屋にて銅吹立のときは銅座より一両名宛が吹屋方を巡視した。銀絞の場合には必ず銀座の立合いを請い、こうして精錬した地売銅は二分の売口銭、すなわち地売銅代銀百目につき、二匁の口銭をもって、吹屋仲間に引渡した。

銅問屋は銅座が開設されると不要になるようだが、銅座の支配下になお存続した。山元に仕入銀の貸付あり、山元もその出銅を問屋に送るのを便としたので、存続を許されたのであつた。¹²⁾

従来は口銭は山元との相対にてこれを受け、かつ御用銅の外は口銭以外に山元仕切値段と売出値段との差額を収得していたが、今回からは銅座において仕切値段を立て、また口銭を一定したので、右仕切値段中から二分の口銭、倉敷料並びに水揚浜出賃を得るのみで、残額は一切山元に引渡さねばならなくなった。蔵敷料を得て、銅座から預っている銅は万一斤数不足すれば問屋より弁償すべき約束であつた。¹³⁾

銅吹屋ならびに仲買は銅座の支配をうけた。吹屋は当時十四軒あり、銅座にて廻銅を引請くるに際し、右荒銅を吹立つべき吹屋が出頭して品質を吟味し、斤量を改め、いよいよ銅座より、これを請取るときは鄭重に取扱い、紛失銅が、

銅座の変遷と住友家

あれば、吹屋一統より弁償し、吹立の際に得べき、出白目出銅に至るまで明白に勘定した。吹銅の売捌も在来からなして来たことなので、銅座より買請け、仲買同様二分の売口銭を得て、これを販売することを許されていた。¹⁴⁾

山元はその出銅を銅座等に銅問屋に送る外、便宜長崎に直廻をなすことを得たが、その斤高を必らず銅座に届出でなければならなかった。その他出銅予定額の届出、半途売、東海廻、囲銅の禁は元文三年令に同じであった。ただそれと異なる点は囲銅と共に質銅を禁じ、囲銅、質銅をなすものあれば、その銅を没収すべしとの一項をいれている。幕府は半途売・質入・囲置などが、大阪廻着銅額の減少を来すものと考えたからであるが、諸国山元における銅産額減少の事実は如何ともする能わなかったのである。¹⁵⁾

明和の銅座は設立の元手銀三千貫を長崎会所から貸与されていた。また会計面では両替はそれぞれ独立はしていたが、この銅座はさきの銀座加役の銅座とはちがって、幕府の監督がきびしくなっていた。¹⁶⁾ 長崎奉行の支配を強くうけ、長崎会所の役人が主役となって、運営されたともいえる。¹⁷⁾

銅座が長崎会所と不即不離になっているのは銅貿易が出血輸出になっていたことによる。長崎会所の出血銅貿易独占は銅座と離れては継続出来なかったのである。

正徳年代以降、長崎会所は銅貿易からは少しも収益をあげていない。この矛盾は銅座と連繋することによってのみ耐え得たのであった。「大意書」をみても銅座も長崎会所も利潤をあげていなかったことがわかる。¹⁸⁾ 長崎会所は定高口商売で渡たす銅、百斤、百十五匁と銅座が山元から買入れる荒銅の平均値百五十匁との差額、すなわち三十五匁を惣荷物出銀のうちから銅座に補償していた。惣荷物出銀とは長崎会所が輸入品を商人に落札させ、これに掛り物をかけて代価を支払わせて出る利益である。¹⁹⁾

官営的な長崎会所と銅座とがタイ・アップすることによって、こうした補償制が継続出来たのであった。

銅座の変遷と住友家

御用銅の買上値段は延享三年に決められてから、据置かれていたが、実際には御手当銀という名目で値が認められていた。別子・立川銅では明和五―享和三年には御手当銀一二・五匁を加えて、一五一匁九八になっている。その他の御用銅山には割当高以外の銅の買上値段を増して、間接の補助をなしていた。それにもかかわらず御用銅の廻着高は次第にへっていく。

一方地売銅の売出し定値段も明和三年以降安永三年、寛政元年と次第に高くなっている。しかも地売銅の集荷ははかどらず、文化二年には毎月銅を売出すことをやめて、年三回の売出しにしている。その後文政二年には定値段をも廃止し、年に九〇万斤を三回に分けて売出すことにしている。²⁰⁾

過書町の銅座は寛政四年五月の大火にて類焼したので常安裏町に仮会所を設けていたが、同年十一月また旧地に新築がなつて、これに移っている。²¹⁾

明和三年六月から大阪町奉行与力同心勘定方普請役の銅座詰があり、糸割符方の銅方兼摂をやめ、西組与力二名、同心二名が銅座掛となつて、日々銅座に出張していた。明和五年与力同心一名宛毎月交代となり、天明八年東組よりも銅座掛の与力同心を出している。組限りにて毎月交代であつた。²²⁾

銅座は古銅の一手買入をなし、これについて細かい規定をも設けたが、これらは銅座額の減少にもとづくもので、三山御用銅の定高は、前に秋田銅六十五万斤を減じて、二百四十五万斤となつていた。ところが寛政四年には秋田銅は四十万斤、同六年盛岡銅二十万斤を減じて、百八十五万斤となつた。これより先銅吹屋は炭値段の騰貴により、収支償わなくなり、銀五十貫目の補助銀の下付を出願する程であつた。

従つて長崎廻り棹銅中にも目方不足や吹方粗悪のものがあつて、寛政二年に長崎奉行永井直廉は阪地に来て、吹屋を召して不始末をなじる有様であつた。しかし吹屋の窮状も酌量せねばならなくなり、銀子を下付したりしている。この頃吹屋・仲買が銅座値段以上に地売銅を売出す弊があつたのも、窮乏の余に出たものであつた。²³⁾

銅座の変遷と住友家

寛政九年五月幕府は大阪町奉行に銅座掛を命じ、また銅仲買を廃し、これより銅座は長崎奉行・勘定奉行・大阪町奉行の三支配になった。また銅の売下げは銅座一手にて行うことになった。

しかも銅廻着額の減少と銅吹屋の困難とはいぜんとしてつづく。寛政六年三山御用銅高は百八十五万斤に減じ、手当銀も増手当銀を出して、採掘を奨励したが、文化元年―天保十三年には別子・立川銅では八匁三三三を増して一六〇匁三三三としている。

糺吹屋大阪屋助蔵・同泉屋吉次郎に上古銅切屑銅の吹方を許可し、泉屋吉次郎が元禄以来別子・立川両銅山を開掘し、長崎御用銅を間断なく売上げ、殊に近来定額外の増売をなし、また地売方へも年々十万斤内外を売上げる段、出精抜群なりと賞して、「銅山御用達」の名目と苗字住友氏を許している。これなども山元吹屋仲間の奨励策であつたろう。²⁴⁾

文化八年以降には地売銅の買上げ、売出値段の引上げあり、全国銅山への特別手当の下付もあって、銅山も一時は回復したが、山方出銅増加して銅座はかえって買収に苦しみ、地売銅も頗る豊富となったので、文政元年十一月には吹銅・荒銅・古銅共百斤につき銀三十目の値下げをなし、文化十年より同十四年に至る五カ年間の廻銅平均高を銅座一年の買入高と定めた。²⁵⁾

文政元年にはこのように毎年の銅買入高を制限し、再び地売銅の買上げ、売出し値段を共に下げた。銅座では銅の滞貨が増え、財政難となり、銅の買入れ代金の支払も年に七〜八〇〇貫目づつ滞るようになる。

そのためこれに先だち、文化十二年二月には「銅山方手当」として金五万両の下金があった。この「銅山方御手当貸付金」はこの年より五カ年間銅座役所において年一割の利息をもって、大阪に廻米をなせる諸家に貸付け、蔵米を引当として、蔵屋敷役人ならびに国元重役一名連印の証文を徴し、元利共に一カ年限に取立て、利銀の内五厘を貸付方諸入用、五厘を銅山方非常手当として積立て、残り九分を大阪御金蔵に上納すべしというにあった。しかしこれは諸家の

銅座の変遷と住友家

返納が予定の如くならなかったようである。²⁶⁾

また文政元年には銅座の地売銅買入資金として一五〇〇貫目を銅座に貸している。²⁷⁾

地売銅の集荷がはかどらぬため、文化二年には毎月銅を売出すことをやめ、年三回の売出しとし、更に文政二年には定値段を廃止し、年に九十万斤を三回に分けて、売出すことにしている。²⁸⁾ その後も地売銅の高騰がつづく。

銅山の経営不振は銅山の銅買上げ値段が不当に安かったからである。この輸出定値段と御用銅の買上値段との差額は、長崎貿易からの利益金によって支払われていたのである。長崎会所は輸入品を一括して安く買いとり、これに掛り物（関税）をかけて、輸入商に入札させていた。この長崎会所の買取り価格と入札価格との差額が会所の利益金になっていた。これに対し銅については銅の買上値段と輸出値段の差額を、銅足し銀又は銅償銀といって、これを掛り物として輸入商に負担させることにより、銅統制をつづけていたのである。²⁹⁾

銅の定値段というのはつまり、外人の方からのものではなく、日本から支払う貿易代金の一部として毎年一定額の銅を割当ててゐたものであった。御用銅はいわば諸国の銅山が「公役」と同様に差出すべきものと考えられていたのである。³⁰⁾

銅座は経営難が続いたし、その業務は多端となり、その持っている金融的な機能はこれを寧ろ町人に委託し、それにまかせねばならぬことになる。

ここに「銅座掛屋」が設けられることになったと考えられる。三井と住友がこれに任命される。この「銅座掛屋」については別に稿をあらためて述べることにする。

朝鮮貿易における対馬藩の銅調達は幕府の銅統制下に組込まれることを好まず、銅吹屋や銅問屋との取引を希望していたが、元文三年には荒銅の品質を一定にするため、当時銅座御用をつとめ、別子・立川銅山をはじめ多くの銅山経営をなしていた泉屋吉左衛門から専ら買うように命ぜられた。つまり銅座の監督下に泉屋より銅を買っていたのである。

銅座の変遷と住友家

明和三年第三次銅座が設置されても同様に、銅座役人立合の下で泉屋吉左衛門から銅を調達することになっていた。朝鮮での公貿易用に調達されることになった泉屋の別子荒銅は看品銅といわれた。看品とは荷見せ検査のことである。この公貿易用荒銅は朝鮮での鑄銭原料になったり、銅器皿・兵器にも使われた。

もちろん延享元年から明和二年までは一時銅座支配をはなれていた。この間も吹屋泉屋吉左衛門から銅を買ってはいたが、しかしのちには酢屋孫四郎と梅野勘助に銅の買集めをさせていた。酢屋は大阪淡路町の薬種問屋で、梅野は対馬藩の御用商人のようである。吹屋から対馬藩へ売渡した銅はすべて長崎会所にとどけられることになっていたが、酢屋・梅野のあつかったものは銅山の抜き売りであつたらしい。

しかし明和期の第三次銅座になると、またその支配を蒙ることになる。しかし銅座よりの買入れ高は少く、調達未収であった。藩の銅調達資金の欠乏によるもので、幕府より下賜金。拝借金をこい、大名貸・名目金貸付により金くりをなし、借金をくりかえす。また銅の代価後納式をとり、銅の延売」をなした。銅の銅売渡も年三回とし、代銀は銅受取後一年半後に銅座に納入するという特別の方法を認められたが、これは天明三年から十年間のことであつた。（実際は五年間）そして老中松平定信は天明八年四月から銅を引替に即刻代銀を銅座に納入するように命じた。「即銀買」である。しかも銅座の対馬藩への銅売渡しは一向によくならなかつた。幕府は銅輸出の縮小策をとり、銅以外の倭物・諸色の輸出をうながし、長崎貿易ではこれが次第にのびて銅の輸出を上廻るに至つたが、日鮮貿易の方では、煎海鼠などは朝鮮の方から輸入する仕末であり、乾鮑・昆布・天草は対馬藩の「倭物方」で仕立てて長崎に廻送する有様であつて、銅に代る輸出品々にことかいていた。

日鮮貿易では銅は公貿易定品としての荒銅、錫代納用としての吹銅が出され、また人参・牛皮・黄芩・煎海鼠・その他薬品の対価として輸出されていた。日鮮貿易ではすでに銀の輸出なく、銅輸出にのみよっている状態であつた。

銅座の変遷と住友家

対馬藩では銅貿易の正常化に力を入れ、銅延売りの復活を訴えている。通信使の聘礼を対馬でとりおこなう「易地聘礼」に成功し、これによって幕府から肥前松浦郡・筑前怡土郡・下野国安蘇・都賀両郡らにおける二万石の加増をうけている外、公作米の輸入不振をうったえている。公作米の輸入杜絶によって藩財政を逼迫したので、幕府はこれらの訴えを聞き入れて、ついに銅の延売りの復活を聞き入れる。かくして対馬藩に限り文化十二年三月より銅代価の銅座上納が、二カ年間猶予されることになる。これは五カ年間と期限をつけられていたが、これは以来延期されて幕末に及んでいた。また文政八年より銅代価は「対馬定値段」と称し、地売市価より安く取引することを格別に幕府より容認せられた。

明和三年の銅座設置で、銅の定値段を銅百斤につき二百十匁と定められていたが、これは年がたつと共に産銅低下で、次第に高くなり、銅座の地売銅の集荷も改良されず、ついに文政二年にはこの定値段が廃止され、あとは入札法によって売渡すことになる。入札法により銅の市価はまたますます値上りしたので、対馬藩は市価に従ってはいない貿易業務にもさしさわるので、文政八年遂に幕府に訴えて、朝鮮輸出銅の買入に限り「定値段」で取引したいとし、市価の入札値段とは別に対馬定値段が設けられる。これは対馬藩の銅調達を援助するものであった。³¹⁾

対馬藩の財政の苦境、銅代銀の支払いの滞りにより銅取引の関係にあった泉屋住友はしばしば借財を申しこまれ、銅代銀や貸銀の担保として朝鮮からの輸入品や対馬産の鉛などを引きとらねばならなかった。文政六年対馬藩が泉屋から銀五〇〇貫目を借用したときには、別家又右衛門の店を対馬藩の産物会所として、朝鮮牛皮を売り捌かせ、その売上金を引当てにすることにしている。ところが文政八年には対馬藩は別に牛皮引請人を勝手に設け、しかも他方では泉屋に廻米蔵元の引請を要請し、又右衛門店には朝鮮木綿をまわしたりしている。対馬藩の財政の窮乏によって朝鮮貿易は次第にゆがんだ方向に進められていったようである。³²⁾

銅座の変遷と住友家

- (1) 「御用付留」(「通航一覽」刊本 第四 一四二頁)
- (2) 「大阪市史」第一 一一四六頁。
- (3) 「垂裕明鑑抄」
- (4) 「大阪市史」第一 一一四七～四八頁。
- (5) 「大阪市史」第一 一一四八頁。
- (6) 「大阪市史」第一 一一四九頁。
「大阪銅座書上控」
- (7) 「大阪銅座書上控」 中井信彦「轉換期幕藩制の研究」九六頁。
- (8) 前掲中井著書 九六頁。
- (9) 「大阪市史」第一 一一四九頁。
- (10) 「大阪市史」第一 一一五〇頁。
- (11) 前掲永積論文 四一四頁。
「諸国銅山見分控」は銅座が復活された元文三年の翌四年から別子銅山で着手されもので、「宝の山」のように国分けにしていない。文政十三年まで調査をつづけているが、銅座や幕府の代官所や諸大名、庄屋らの依頼でなされたもので、文化八年には功によって「銅山御用達」の名目と住友の苗字をもらう。向井芳彦「住友の歴史」 七七頁。
- (12)(13) 「大阪銅座書上控」,「大阪市史」第一 一一五一頁。
- (14) 「大阪銅座書上控」
- (15) 「大阪市史」第一 一一五二頁。
- (16) 山脇悌二郎「長崎唐人貿易」一七二頁。
- (17) 「銅座之事」(「誠齋雜記」)大阪銅座地壳銅代銀書付(「大意書」二三頁)
- (18) 「大意書」(「近世社会経済叢書」第七卷 一〇頁)
- (19) 前掲山脇氏著書, 一七二頁。
- (20) 前掲永積論文 四一七頁。
- (21) 「大阪市史」第二 一二四頁。

銅座の役人の住んでいる所を銅座屋敷といったが、古くは内久宝寺町二丁目にあり昭和三年六月にそこに銅座幼稚園がたてられた。またのちにはこの銅座屋敷が西

銅座の変遷と住友家

天満樋の上町三十八番にあった。この屋敷跡に日野雲州堂という雲州算盤の店があり、その庭に銅座稻荷がのこっていた。戦争中強制疎開となり、稻荷祠は菅原町に移っている

- 22 「大阪市史」第二 一六三頁。
- 23 「大阪市史」第二 一三〇頁。「大阪銅座方覚書」「垂裕明鑑抄」
- 24 「大阪市史」第二 三九六頁。
- 25 「大阪市史」第二 三九六頁。「垂裕明鑑抄」
- 26 「銅座方御貸付金一件」「大阪市史」第二 二九九頁。
- 27 永積前掲論文 四一四頁。
- 28 永積前掲論文 四一三頁。
- 29 永積前掲論文 四一八頁。
- 30 「崎陽群談」
- 31 田代和生「対馬藩の朝鮮輸出銅調達について」(「朝鮮学報」第六六輯)
- 32 「住友商事株式会社史」一四頁。